

「成人した子とその親のサポート関係についての調査」 調査結果の概要

拝啓 残暑の候ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

先日は、私どもの調査にご協力いただき、ありがとうございました（2013年1～3月実施の「成人した子とその親のサポート関係についての調査」）。おかげさまで多くの方からご回答をお寄せいただき、成人親子のサポート関係についての貴重なデータを集めることができました。皆様のお力添えに厚く感謝申し上げます。

本パンフレットは、今回の調査結果を前回（2000年）の調査結果と比較分析したものです。この十数年に起こった成人親子関係の変化を概観することができます。何らかの形で皆様の暮らしのご参考になれば幸いです。

敬具

平成 25 年 8 月

関西大学 社会学部 准教授 保田 時男

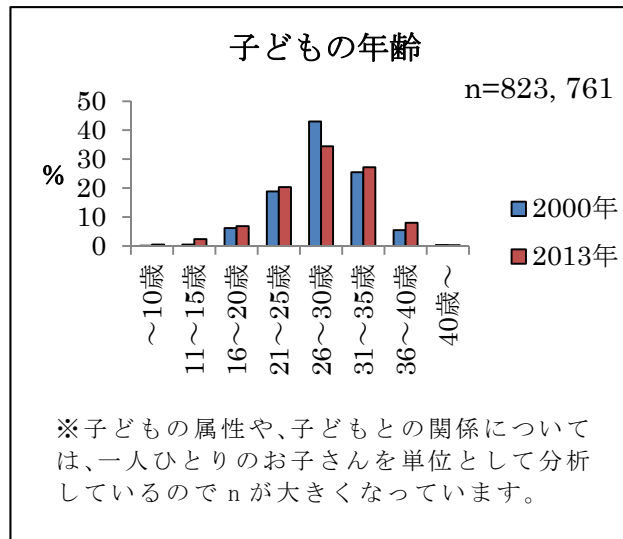
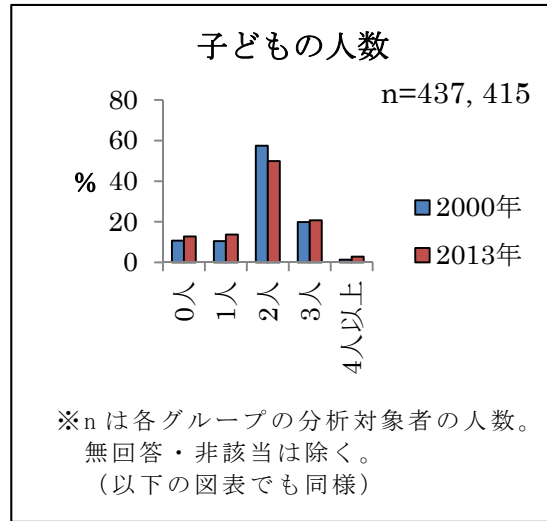
調査の概要

第 2 回調査（今回調査）	第 1 回調査（前回調査）
調査時期：2013年1～3月 調査対象：2012年12月31日時点で 茨木市在住で53～62歳の男女 600名 抽出方法：層化二段無作為抽出 調査方法：郵送 有効回収数：416（69.3%）	調査時期：2000年11月 調査対象：2000年10月31日時点で 茨木市在住で53～62歳の男女 600名 抽出方法：層化二段無作為抽出 調査方法：訪問留置（一部は郵送） 有効回収数：437（72.8%）

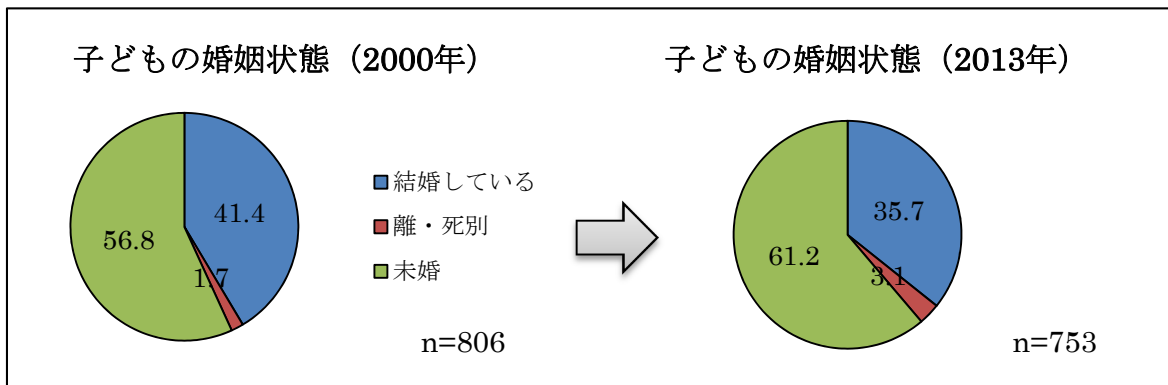
1 子どもの多様化

この調査では、回答者の方がお持ちのお子さん一人ひとりとの関係を調査しました。右の図のように、お子さんを2人お持ちの方が圧倒的に多いです。また、お子さんの年齢は20代から30代前半の方が多くなっています。

前回（2000年）と比べても大まかな傾向は同じですが、この十数年の間に「多様化」が進んでいるようです。お子さんが2人の方がやや減って（57.4%→49.9%）、お子さんがいない方が増えたり（10.8%→12.8%）、逆に4人以上お持ちの方が増えたりしています（1.4%→2.9%）。また、子どもの年齢についても、10代前半以下の若いお子さんが増えたり（0.6%→2.9%）、逆に30代後半以上のお子さんの割合がやや増えたりしており（5.8%→8.3%）、こちらも多様化しているようです。

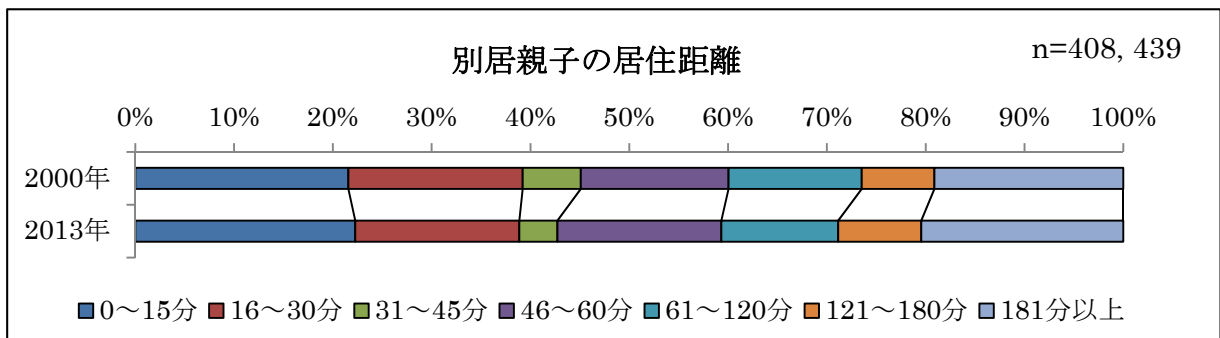
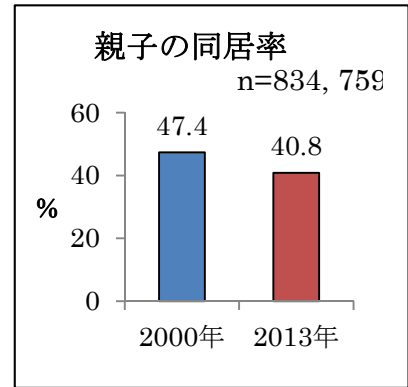


下のように、結婚している子どもの割合は前回よりも減っています（41.4%→35.7%）。結婚する年齢が遅くなっていることに加えて、一生結婚しない人が増えていることも反映しているようです。また、離・死別（ほとんどは離婚）して、独身に戻ることも徐々に増えています（1.7%→3.1%）。「ある程度の年齢になれば子どもが結婚するのは当たり前」ではなくなっていることがわかります。



一方で、親子の同居割合は、この十数年で着実に下がっています。今回の調査では同居している親子は約4割にとどまりました。結婚していなくても、親元に留まっているわけではないようです。

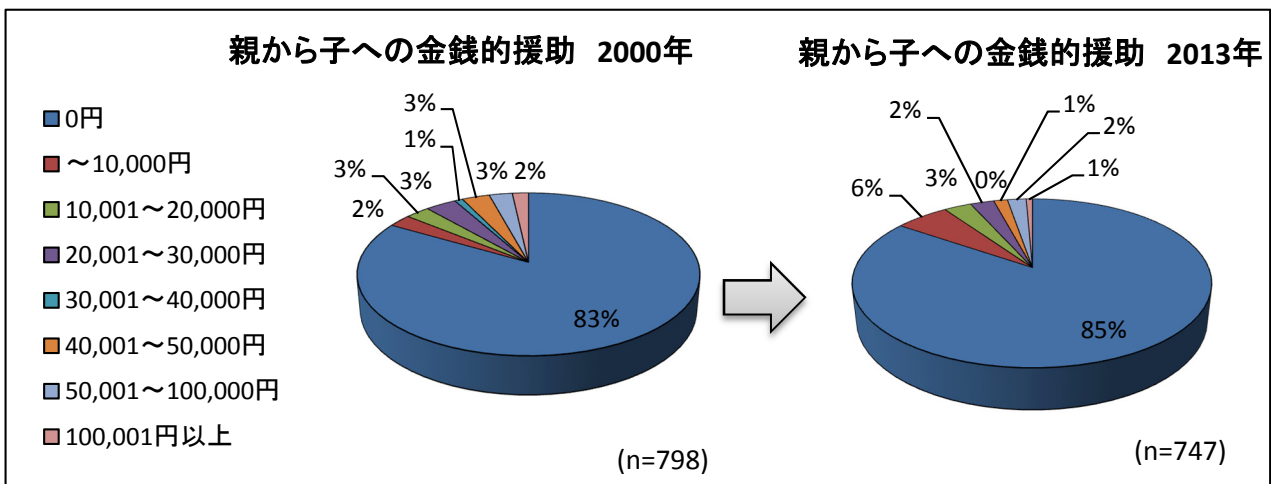
別居している場合の子どもとの家との距離は、平均1時間弱で大きな変化はありません。30分以下の比較的近い所に住んでいる子どもが4割近くにのびります。

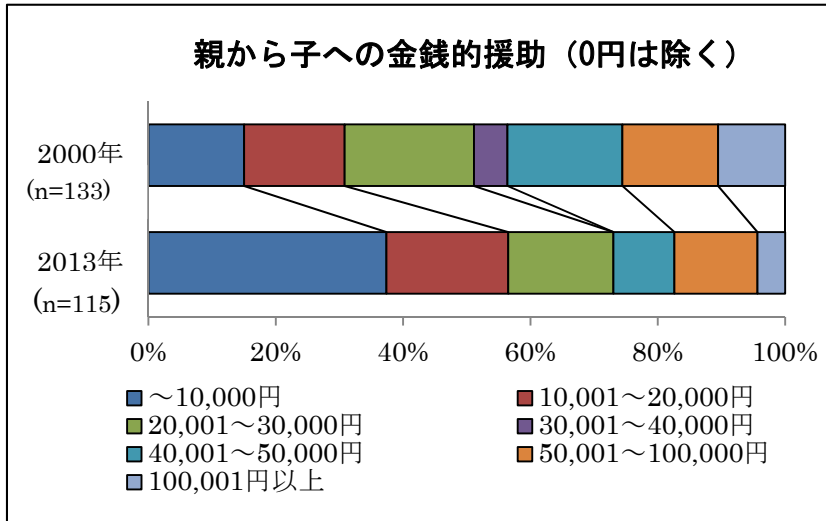


2 親子のお金のやりとり

このような親子は、お互いの生活をどのようにサポートしているのでしょうか。金銭的やりとりから順に概観します。

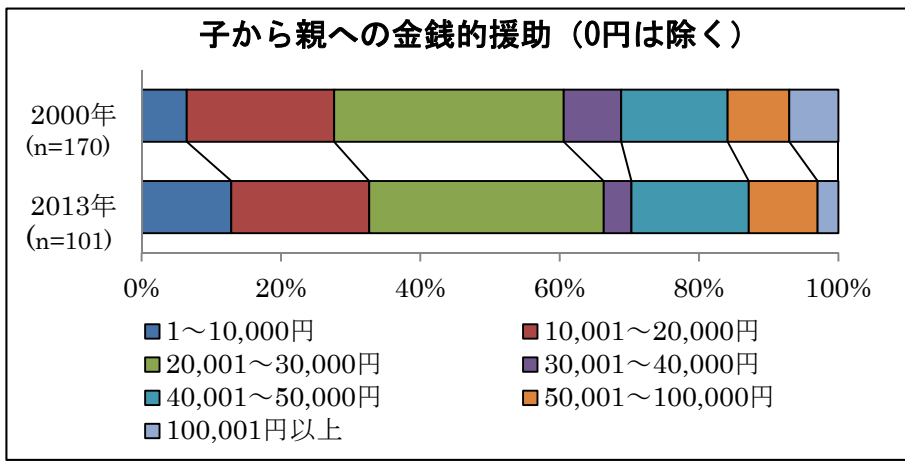
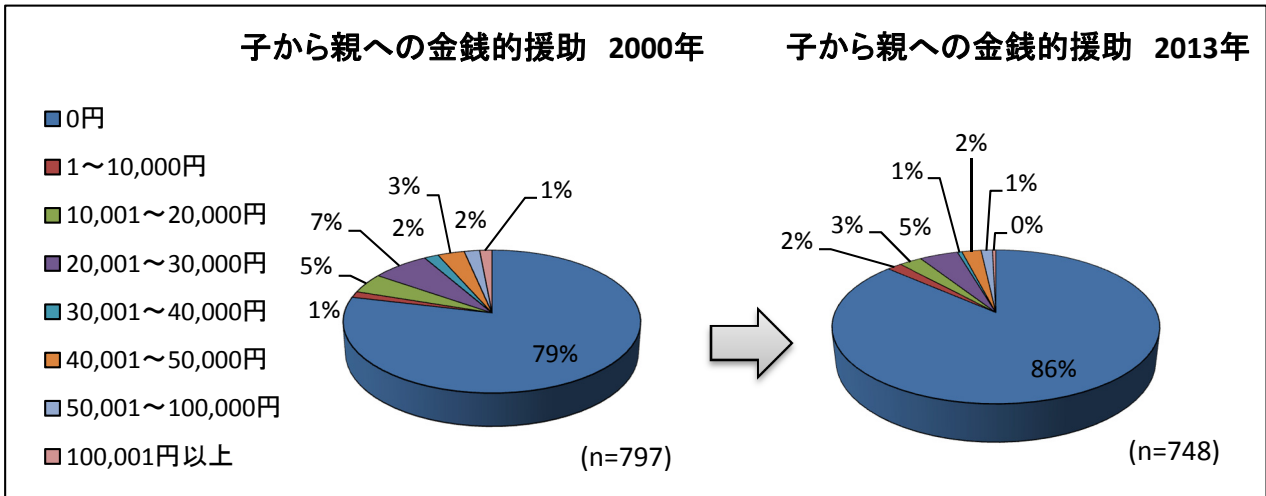
最初に「親から子への1か月あたりの金銭的援助」の額を見えます。2000年の調査では83%が行わないと回答し、2013年に行った調査では85%が行わないと回答しました。この結果より、成人した子どもに日常的に金銭を与えることは少ないという傾向が現在も維持されていることがわかりました。





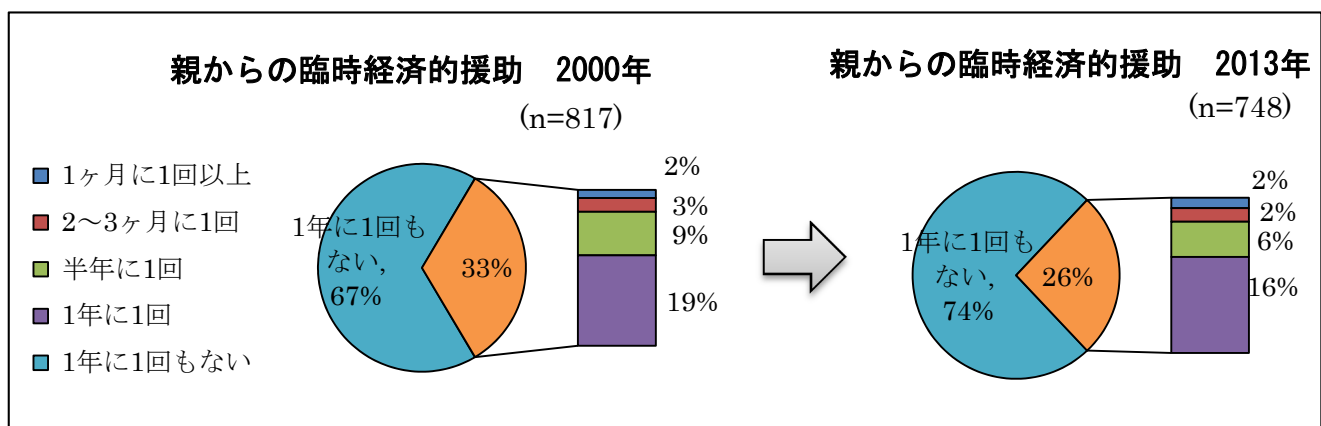
ただし、援助をしている場合の金額については変化があるようです。少額の援助である「1~10,000円」の割合が2000年の調査と比べて3倍に増加しました。全体的にみて援助額は少なくなったと言えます。

逆に、「子どもから親御さんへの1か月あたりの金銭的援助」はどうなっているのでしょうか。下の図のようにやはり援助を行わない子どもが多数派で、4分の3以上を占めています。さらに、2013年の調査では援助をしない子どもの割合が増えていることがわかりました。また、子が親へお金をわたす場合の援助額も全体的に少なくなったと言えます。



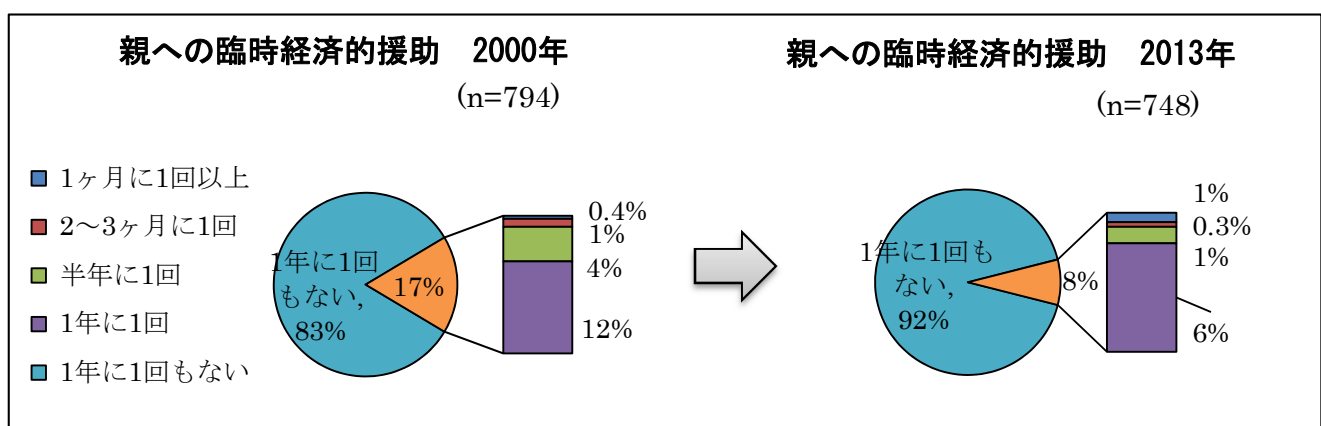
成人親子が日常的に金銭的なサポートをすることは、どんどん少なくなっているようですが、困ったときに臨時でサポートをすることはどのくらいあるのでしょうか。この調査では、「臨時で5万円以上の金銭や品物、サービスを与えること」が1年にどのくらいあるかを尋ねました。

2000年の調査では、「親から子への臨時経済的援助」をおこなうことは、67%が1年に1回もないと回答しました。2013年の調査では、この割合が74%に増え、臨時経済的援助をしないという親が増加しました。



さらに、逆方向の援助（子どもが親に臨時経済的援助をすること）については、援助をしない傾向がさらに強くなっています。1年に1回も親を援助しないことは、2000年には83%でしたが、2013年には92%とおおよそ1割増加しました。

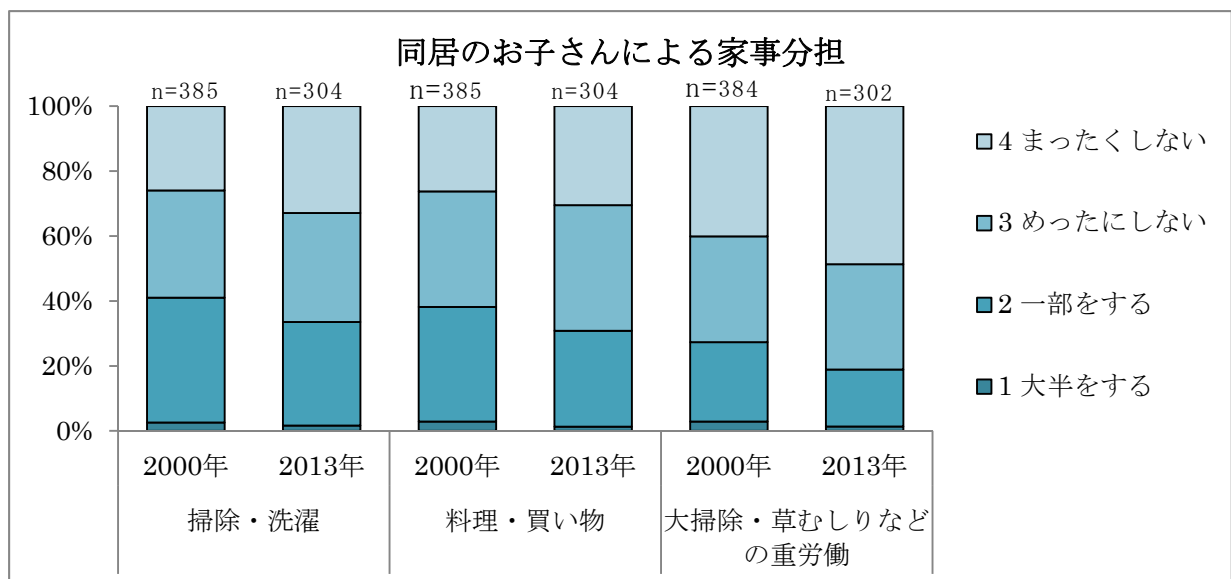
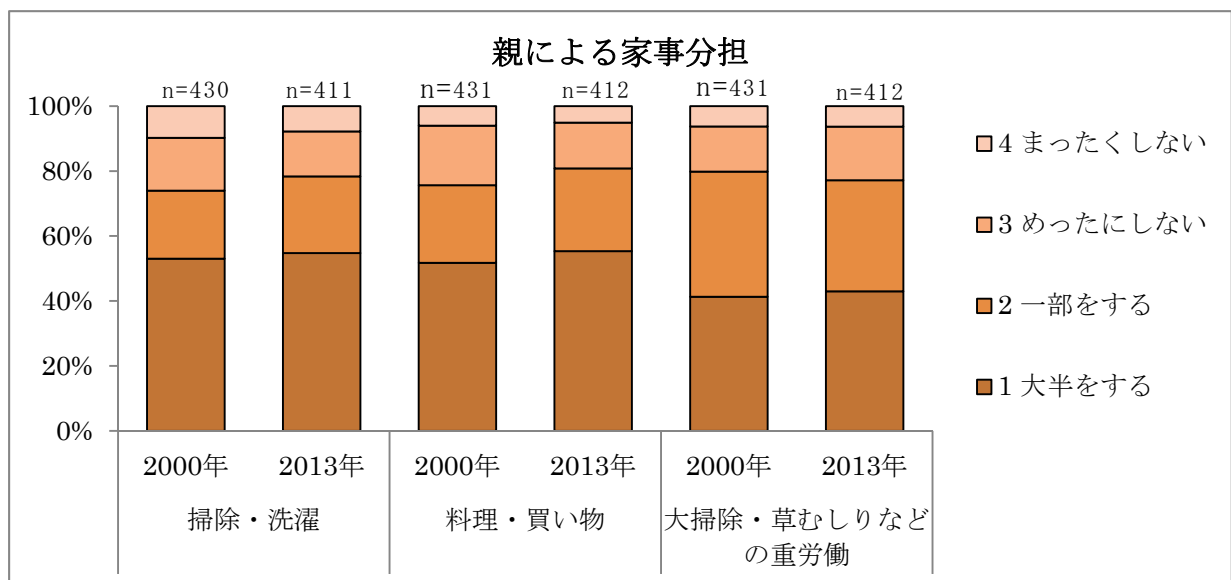
つまり、親からのサポートであれ、子からのサポートであれ、成人親子の間で金銭的な援助のやりとりをする割合は年月の経過とともに減っていることがわかりました。



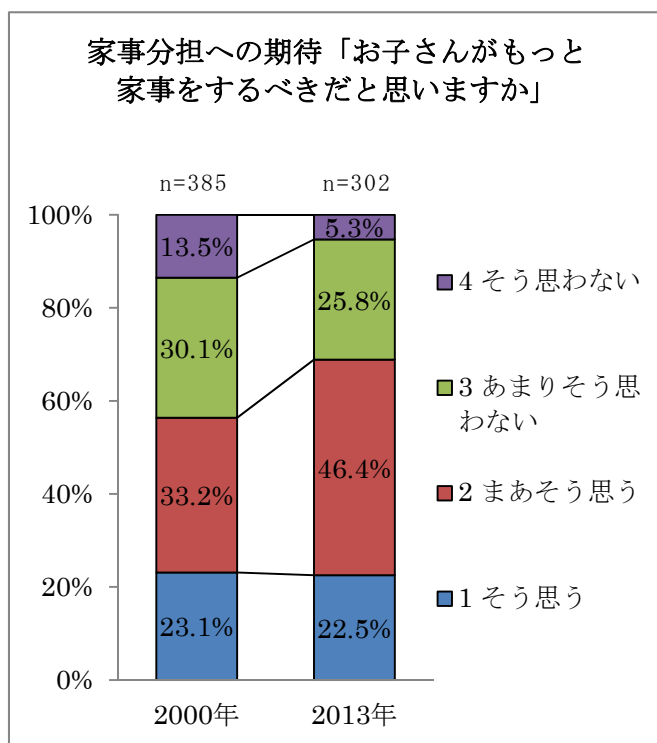
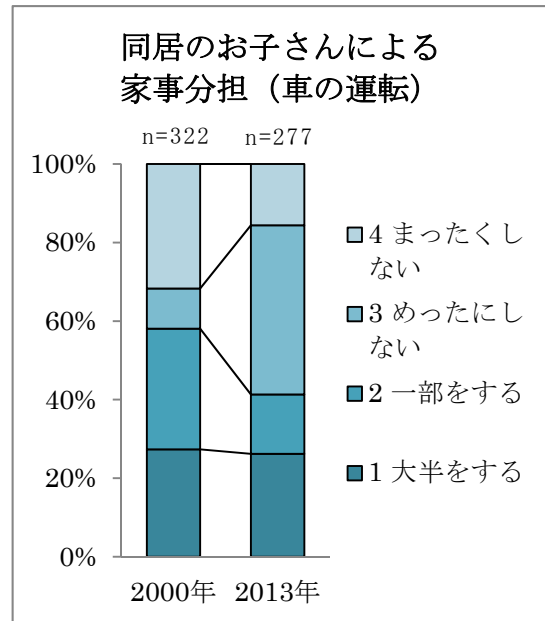
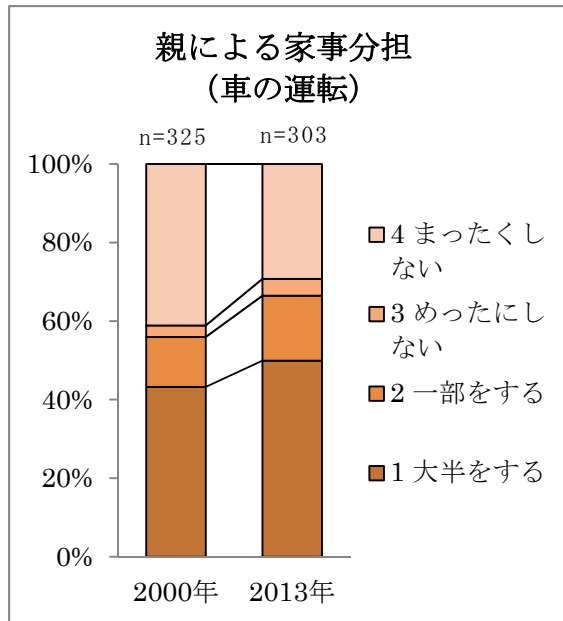
3 親子の間の家事・世話のやりとり

では、金銭的なサポートではなく、家事やケア（介護や育児の手伝い）のやりとりはなされているのでしょうか。まず、いっしょに暮している親子について、家事の分担の仕方を見てみます。下の図は「重労働」「掃除・洗濯」そして「料理・買い物」それぞれの家事の様子です。2000年と2013年の調査を比較すると、親御さんの分担する割合は変わりませんが、お子さんの分担する割合は減っていることが分かりました。

これらから考えると、親御さんの家事労働が増え、いっしょに暮している子どもものの家事の負担が減っていると予想されます。家事の面では、大人になっても子どもは親の家事に頼る傾向が強くなっているようです。

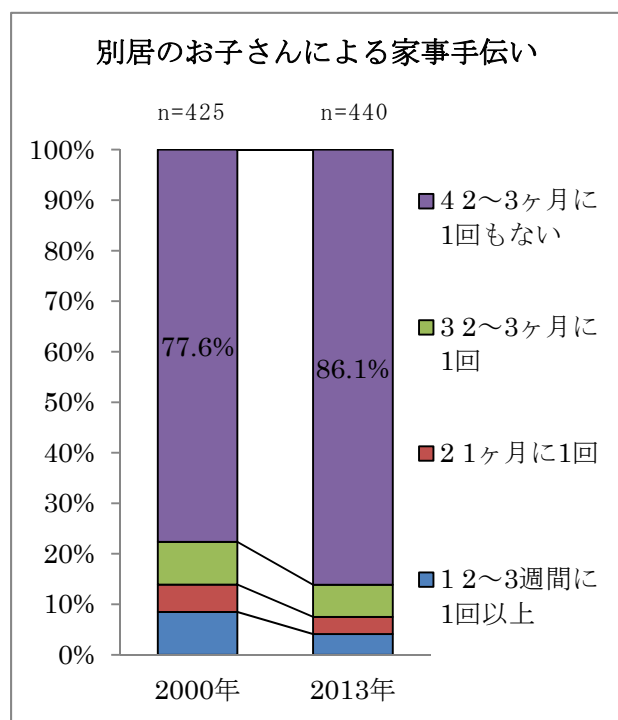
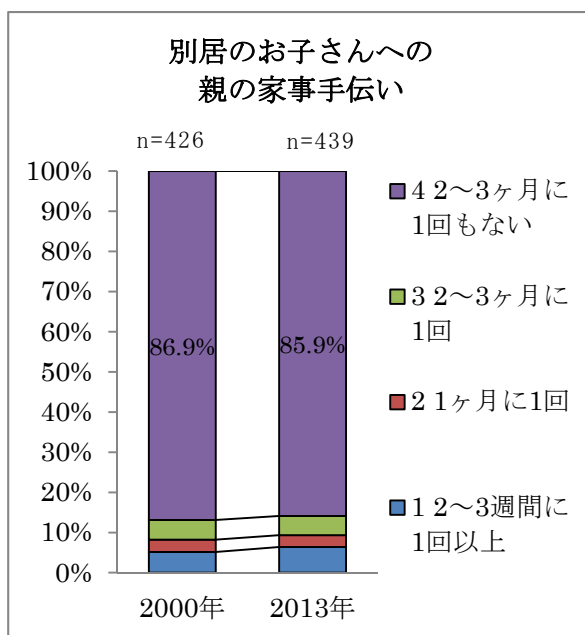


さらに、家事の中でも「車の運転」だけはより極端な変化が見られました。下の二つの図から、親御さんの家事分担の割合が増えているのに加えて、お子さんの家事分担の割合（一部以上をする割合）が20%ほども減っているということが分かりました。他の家事よりも、親の負担が増す傾向がさらに強いようです。



このような家事の現状について、親御さんはどのように感じているのでしょうか。子どもがもっと家事をするべきか、という質問に対する答えは左の図のようになりました。親御さんのお子さんに対する家事分担の期待は明らかに高まっています。今回の調査では、7割近くの親御さんが、子どもはもっと家事をするべきだと感じているようです。

次に、別々に暮している親子の間で、お互いの家の家事をどのくらい手伝っているのかを調べてみました。右の図から、親御さんがお子さんの家の家事を手伝う頻度には、2000年と2013年の間であまり変化がありませんでした。8割以上の方がほとんど手伝いをしていません。

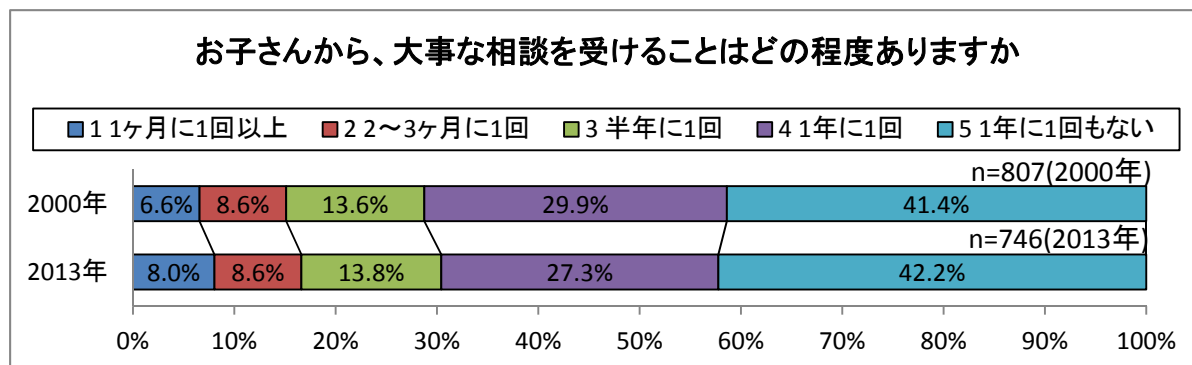


逆に、お子さんによる親御さんの家への家事手伝いについてはどうでしょう。先ほどと同じように「2~3ヶ月に1回もない」が圧倒的に多いですが、その割合はさらに増えてきています。

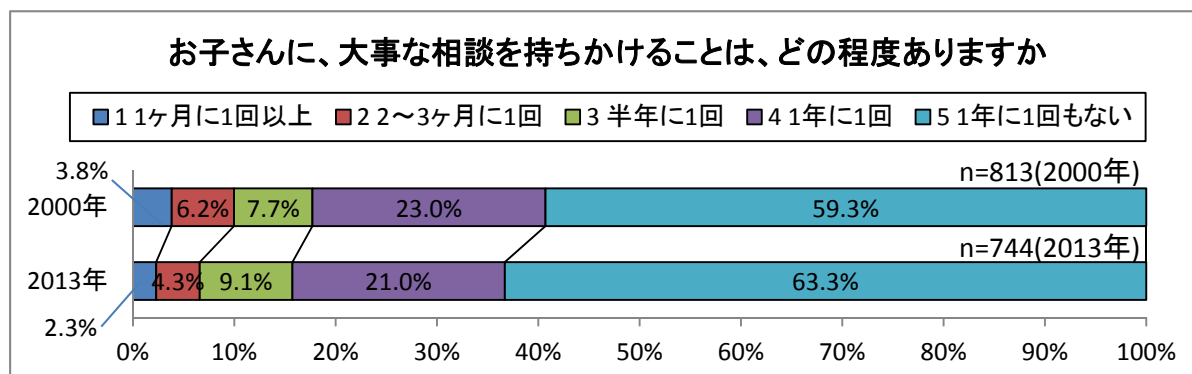
親御さんのお子さんに対する家事分担の期待は高まっているのに、お子さんが親御さんを手伝うことは全体的に減っているということが分かりました。家事をする子どもが減ってきていることによって、親御さんの期待（不満）が高まっているのかもしれません。

4 親子の心理的な関係

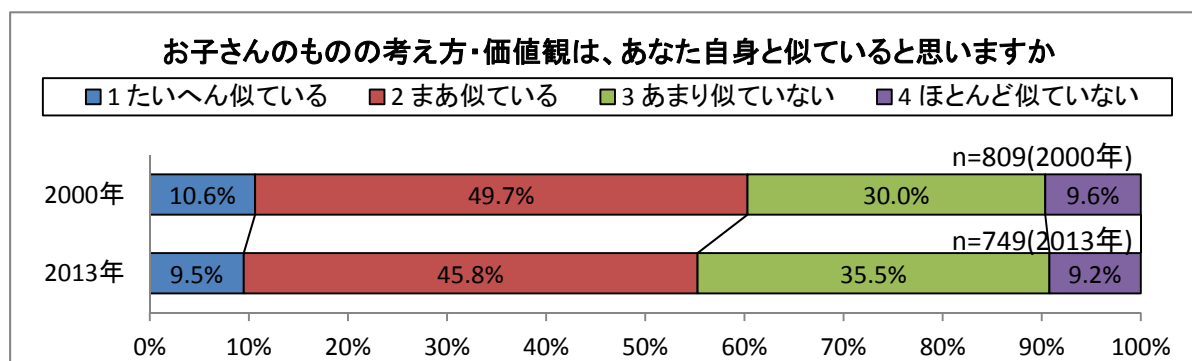
では、親子関係の内面はどのようになっているのでしょうか。親御さんがお子さんから相談を受ける機会は、下のように2000年、2013年を通して大きな変化はありません。半数以上が1年に1回は相談を受けているようです。



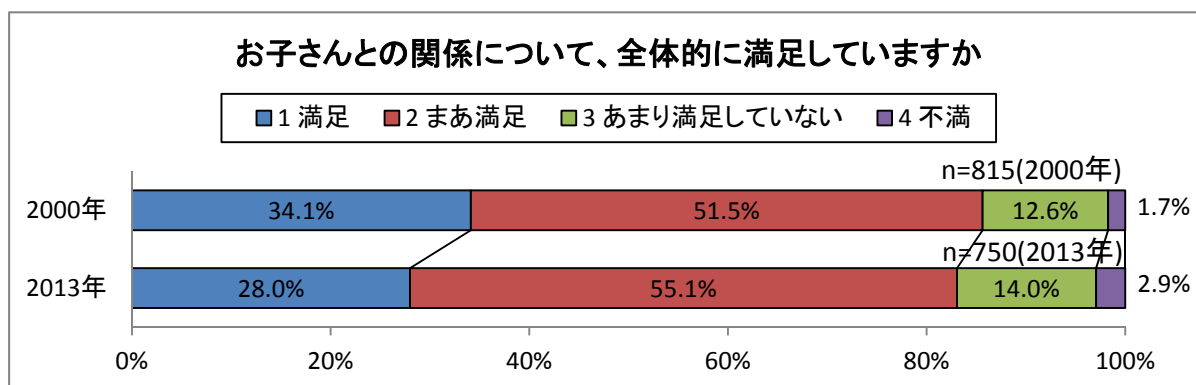
逆にお子さんに相談を持ちかけることは少ないようです。2000年でも「一年に1回も相談をしない」人が半数以上ですが、2013年ではこの傾向がさらに強くなっているように見えます。成人しても、子どもからすれば親は頼りになる存在ですが、親が精神的に子どもを頼りにすることは少ないようです。



親子の一体感（価値観の一致）についてはどうでしょうか。下のように、お子さんと同じ価値観を持っていると感じている親は多いようですが、2013年調査では、そう思っていない親の割合がやや増えています。お子さんとの価値観の違いがお子さんへの相談をするかどうかに影響しているのかもしれませんが。



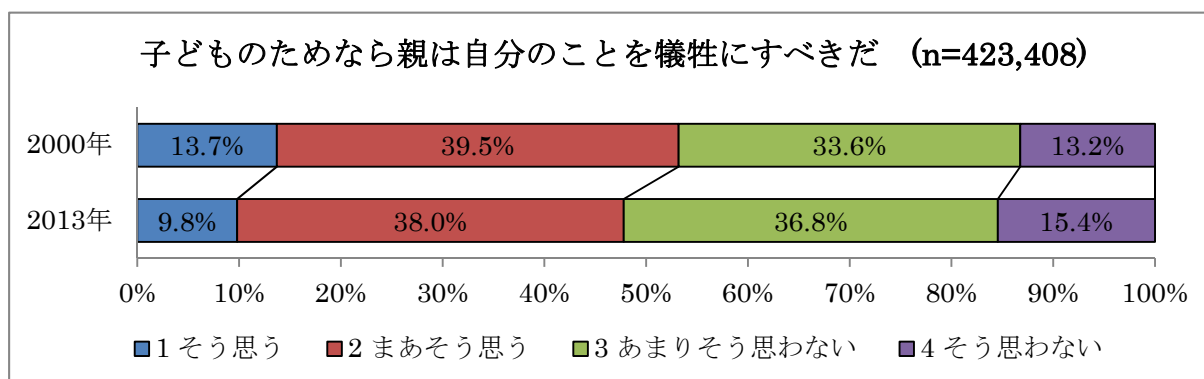
最後に、お子さんとの関係について、全体的に満足しているのかどうかを見てみましょう。関係に満足している方が大多数のようです。2000年、2013年ともに「満足」「まあ満足」と答えた割合が多数を占める形になっています。ただし、その割合は今回の方がわずかに小さくなっています。いまのところ大多数の親子はよい関係を築いているようですが、一部の親子関係に悪化のきざしが見えることには注意が必要と思われます。



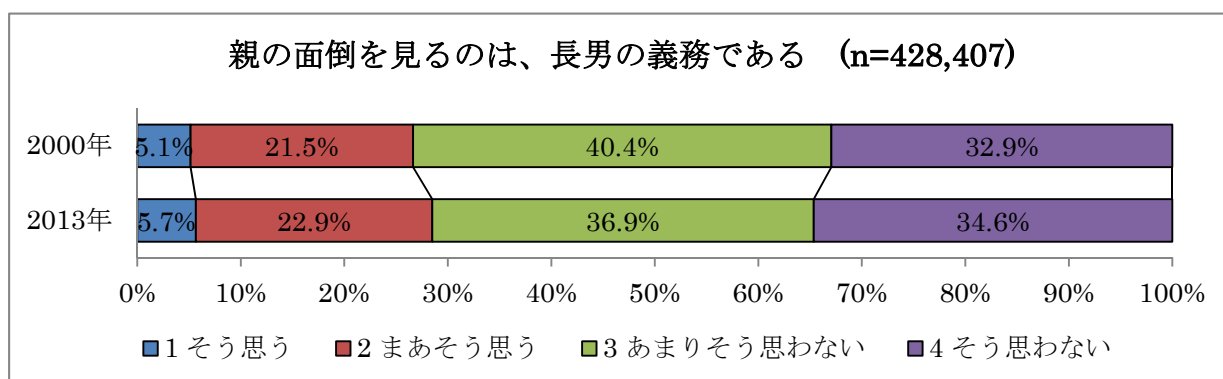
5 親子関係についての規範意識

親御さんは、親子関係のあるべき姿についてどのように考えているのでしょうか。4つの規範意識の変化を調べてみました。

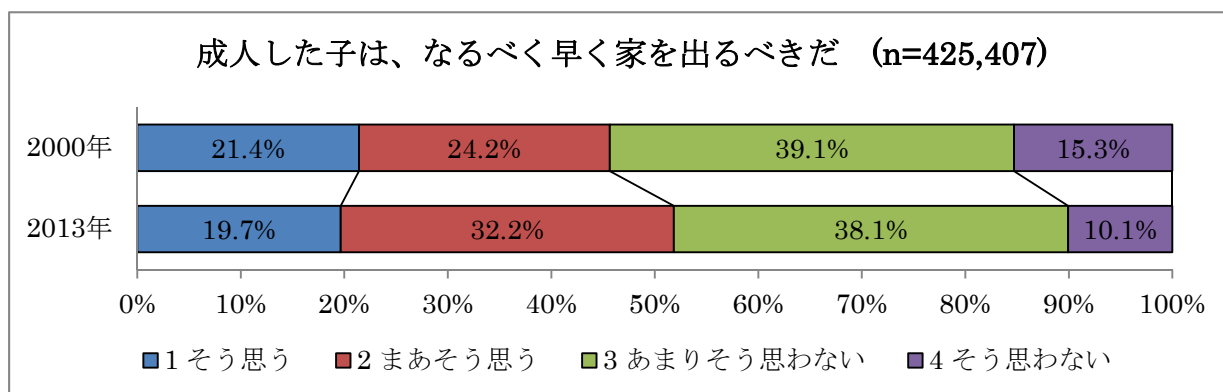
「子供のためなら親は自分のことを犠牲にすべきだ」と考える親の割合は、2000年と2013年で大きな変化は見られません。ほぼ意見が二分されています。「そう思う」「まあそう思う」と答えた人が若干減少し、「あまりそう思わない」「そう思わない」が若干増加していますが、これもそこまで大きな違いとは言えないでしょう。



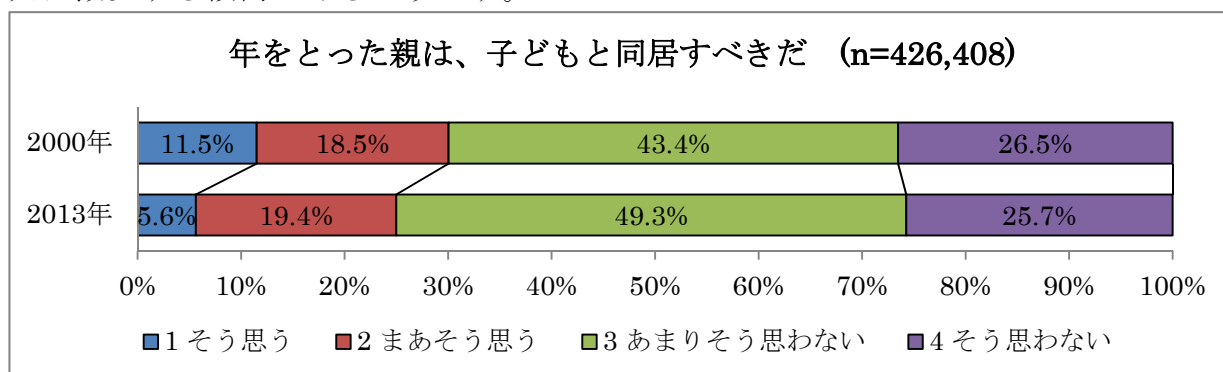
続いて「親の面倒を見るのは、長男の義務である」という考えについてはどうでしょうか。こちらも2000年と2013年で大きな変化は見られません。現在の日本では、長男の義務を積極的に支持する親は3割にも満たないようです。



また、「成人した子は、なるべく早く家を出るべきだ」という質問に対しても2000年と2013年の答えは大きな変化は見られませんでした。ただ、やや賛成が増える傾向はあり、2013年では、成人した子はなるべく早く家を出るべきと思う人が半数を超えました。



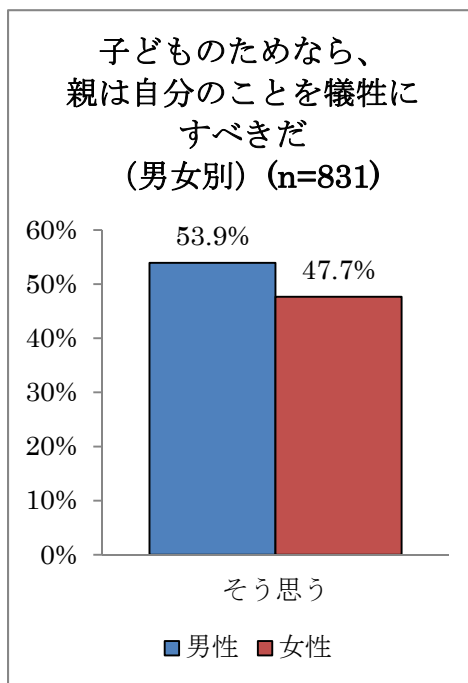
最後に、「年をとった親は、子どもと同居すべきだ」と思う親についてはどうでしょう。どちらの年でもこの意見を支持する人は少数派ですが、さらに2000年に比べ2013年では5%減り、年をとった親は、子どもと同居すべきではないと思う人は減少する傾向があるようです。



全体的に見て 2000 年と 2013 年の調査では、その規範意識に格段に大きな違いは見られず、この 13 年間で子どもに対する意識は比較的安定しているということが分かりました。ただし、ゆるやかな傾向としては、伝統的な規範にとらわれない考え方がゆっくりと広がっているようです。

さらに、男女別で比較を行うと、女性の方が伝統的な規範から自由な傾向が見られました。たとえば、「子どものためなら、親は自分のことを犠牲にすべきだ」という意識について「そう思う」と答えた人は、右のように男性の方が多くなっています。

「大切なわが子のためならどんなことも厭わない」「困ったとき常に支えてくれる存在」といったイメージが強い母親像からは少し外れた結果となりました。これは子ども(や夫)のためだけでなく、自分のことも大切に生きようとする女性像のあらわれといえるかもしれません。



※本パンフレットは、関西大学社会学部 保田研究室の有志メンバーが作成しました。不十分な点もあろうかと思いますが、お赦してください。
(作成協力者：2013 年度 3 年次生 遠藤 大塚 木村 小西 斉藤 妹尾 陳 箔谷 福井 福田 本山)

※本調査研究(2013 年調査)は、平成 22~24 年度日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受けて行っています(課題名:「ダイアド集積型の家族調査データによる成人親子関係の研究」、研究種目 若手研究(B)、課題番号 22730422、研究代表者 保田時男)。

前回の調査研究(2000 年調査)は、平成 11~13 年度文部省科学研究費補助金の助成を受けて行いました(課題名:「交換理論アプローチによる現代日本の家族調査」、研究種目 特別研究員奨励費、課題番号 99J02391、研究代表者 保田時男)。

※本調査に関するご質問、お問い合わせは、下記までお願いいたします。
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35
関西大学社会学部 准教授 保田 時男